

政治的悪の規範理論的分析

——政治的リアリズムを中心に——

松 元 雅 和

目 次

はじめに

1. 政治的リアリズムのバラエティ
2. リアリズムの規範理論
3. 「汚れた手」の倫理
4. 国際政治理論との関連

おわりに

「政治的な選択というものは必ずしもいちばんよいもの、いわゆるベストの選択ではありません。それはせいぜいベターなものの選択であり、あるいは福沢諭吉のいっている言葉ですが、『悪さ加減の選択』なのです。」(丸山 2014 : 369)

はじめに

正義の裏には必ず悪が存在することは、テレビを見始めたばかりの子どもにとってさえ周知の事実である。しかしながら、政治学において規範研究を担っている政治哲学や政治理論は、——昨今の正義論ブームが示したように——従来正義の側面にばかり焦点を当て、悪の側面に同様の分析を加えてこなかったのではないか。確かに近年では、戦争や刑罰といった古典的トピックに加えて、暴力、嘘、腐敗、偽善など、政治的悪の個々のトピックに関するまとまった著作が著されるようになってきている (Bufacchi 2009 ; 2011 ; Carson 2010 ; Heywood 2015 ; Runciman 2008)。とはいえ、正義と悪の関係、さらには政治と悪の関係をめぐる体系的検討は、正義論に比べればまだ発展途上段階にある¹⁾。

1) 本稿が採用する規範理論的分析ではなく、「病理学」ないし「生理学」的分析

本稿ではこの課題に取り組むため、昨今政治哲学分野において研究関心が高まっている政治的リアリズム論争を分析の俎上に載せたい。「政治的リアリズム」とは、一口で言えば、政治の自立性や固有性を唱える一群の議論である²⁾。政治は法律、経済、道徳その他のいかなる領域とも異なる別個の領域であって、政治学の対象はその他の学問分野に還元できるものではない。とりわけ、政治哲学を道徳哲学の一応用部門と捉える見方に厳しい視線が向けられる。それゆえこれらの論者は、現実政治に特有の心理的・実践的・制度的次元に焦点を当てる傾向がある (Galston 2010 ; Sangiovanni 2008 ; Waldron 2013)。

政治的リアリストの問題提起は多岐に及んでいる。第一に政治の状況の問題——政治においては紛争や対立の発生が不可避的であり、合意形成に根差した正義の観念には限界がある (Mason 2010 ; Sleat 2013 : ch. 2 ; Waldron 1999)。第二に正統性の問題——合意形成に限界がある以上、政治的決定はその内実の正しさとは別個に、つねに強制力の行使を含まざるをえない (Ceva and Rossi 2012 ; Sigwart 2013 ; Sleat 2014 ; Stears 2007)。第三に政治的判断の問題——政治的状況下においては、しばしば「慎慮」と呼ばれるような、個人道徳とは別種の (秩序や帰結重視の) 政治道徳が必要になる (Williams 2005)。第四に汚れた手の問題——以上の政治道徳を実現するためには、暴力や嘘のような道徳的に疑わしい手段に訴えることもときに許される (Bellamy 2010 ; Coady 2008 : chs. 4-5)³⁾。

↘ではあるが、現時点で邦語で読める最良の文献は Friedrich 1972 ; 中金 2000 である。

2) R・ゴイスと B・ウィリアムズがその現代的古典としてしばしば挙げられる。政治的リアリズムの特徴や論争の概観としては、Galston 2010 ; Honig and Stears 2011 ; Philp 2012 ; Rossi and Sleat 2014 を参照。

3) 加えて、政治的リアリズム論争を、哲学的・抽象的 (=オックスフォード的) 手法対歴史的・文脈的 (=ケンブリッジ的) 手法という方法論的対立と関連づける見解や (Runciman 2012)、分析哲学対大陸哲学という方法論的対立と関連づける見解もある (Chin forthcoming)。

ちなみに政治的リアリズムは、理想化の問題 (松元 2015 : 第 4 章) や実行可能性の問題 (松元 2015 : 第 5 章) などの応用政治哲学の問題群と並行して論じられることもある。ただし正確に言えば、一方で応用政治哲学の問題群が、政治哲学↗

大別して、第一・第二の問題群は、政治的決定を下す際の条件設定についての形式的特殊性について論じており、第三・第四の問題群は、そうした条件設定下における政治的決定の内容的特殊性について論じている。もちろん条件と内容は単純に切り離せるものではないが、紙幅の都合から、第一・第二の問題群については他の場所に譲り（松元 2015：第6章）、本稿ではもっぱら、政治的悪に直接関わる第三・第四の問題群に焦点を絞ろう。主たる問いは、政治的リアリストが力説する政治的判断や汚れた手の問題を、規範理論の枠組み上でどのように分析・評価できるかということである。

本稿の構成は以下のとおりである。はじめに、道徳と政治の距離をめぐって政治的リアリストの内部に見出される多様性（無道徳テーゼと別道徳テーゼ）を確認し（第1章）、次に、政治の世界において道徳の所在と機能を必ずしも否定しない後者のタイプにおける別道徳の中身を定式化する（第2章）。さらに、定式化されたリアリスト的規範理論の延長線上にある「汚れた手」の問題を義務論／帰結主義の観点から分析する（第3章）。最後に、以上の政治的リアリズムの規範理論的分析が国際政治理論における古典的・構造的リアリズムの潮流に対してもつ含意について言及する（第4章）。

1. 政治的リアリズムのバラエティ

今日、政治的リアリストの批判の矛先は、J・ロールズあるいは彼以降の英米圏のリベラルな主流派——かれらの用語では「道徳主義」あるいは「倫理第一主義」——に向けられている（Geuss 2008：introduction；Williams 2005：ch.1）。リベラルな主流派は概して政治哲学を道徳哲学における一応用的分野として位置づけるが、政治的リアリストに言わせれば、権力であれ利害であれ正統性であれ、他の人間活動とは異なる「政治的なもの」それ自体に関心を向けるのが

↘の現実政治への応用の不十分さに関心をもつものに対し、他方で政治的リアリズムの問題群が、政治哲学の現実政治への応用の不適切さに関心をもつ点で、両者の争点は本質的に異なっている——あるいは逆向きでさえある——と思われる（Baderin 2014；Sleat forthcoming）。

政治哲学固有の主題である。このように[・]道徳と[・]政治を対置させる見方は、現代政治哲学に限らず、政治思想史や国際政治学におけるリアリズム思想に共通する特徴であるといえる。

とはいえ、その内実を分析するならば、実は政治的リアリズムの主張も一枚岩ではない。ある主張によれば、政治の世界とは権力という核心を道徳という表面が取り繕う場所だと捉えられる（無道徳テーゼ）。別の主張によれば、政治の世界とは通常の道徳とは別種の道徳が要請される独自の場所だと捉えられる（別道徳テーゼ）。政治的リアリストは、異口同音に道徳に対する政治の優位を唱えるが、実は道徳それ自体からの距離は人それぞれである。本章では以上の違いを、現代政治的リアリズムの代表的論客である R・ゴイスと B・ウィリアムズに照らし合わせながら確認してみたい。

政治の無道徳性

政治的リアリズムのひとつの系譜は、政治の世界を権力という力学的作用が趨勢を決する一種の必然的空間として描くものである。私たちが受け入れている倫理や道徳は、一皮剥けば現れるこうした「^{マハト・ボリチャーフ}権力政治」の表層でしかない。ゴイスは F・ニーチェを思わせる口ぶりで、「倫理は通常政治の亡骸である。どこかの過去の対立で勝利した者が、現在と将来をも手に入れようとその手を伸ばしている」と喝破する（Geuss 2010 : 42）。政治の現実が権力に左右される以上、道徳を中心的に分析する政治哲学はそもそもの的を逸している。むしろ「政治について考えたいならば、最初に権力について考えよ」ということだ（Geuss 2008 : 97）。

政治的リアリズムの思想的系譜を遡れば、古代ギリシアの歴史家トゥキディデスの政治思想が、この種の〈無道徳テーゼ〉の始祖として位置づけられるかもしれない。その世界観は、彼が残した「メロス島の対話」の説話によって鮮やかに描かれている。古代ギリシアにおいて、覇権的地位を狙うアテナイは小国メロスに対して圧倒的武力を背景に降伏を迫った。メロスは正義や尊厳に訴え、自国の平和と中立を守ろうとしたが、アテナイは断固としてこれを拒絶し、

遂にはこの小国を滅ぼしてしまった。結局のところ、道徳は対等な権力という真の土台を背景にしないかぎり、単なる共同幻想にすぎなかったのだ⁴⁾。

しかしながら、道徳ではなく権力こそが政治の趨勢を決するというこの見方には留保が必要である。なぜなら、事実問題として〈無道徳テーゼ〉が相当極端な見解であることは、政治家や市民がしばしば道徳的議論に訴えることに端的に示されているからである。例えば、メロス島の侵略に際しては、実際はアテナイ国内でさえその是非について喧々譁々の討議がなされていた (Walzer 1977 : 5-13/48-64)。今日の国際社会でも、諸国は国連憲章を尊重して侵略を控えたり、国際合意を尊重して非人道的兵器の削減を進めたりしている。この意味で、政治の世界には漠然ながらもある種の「道徳的リアリティ」が存在しているのだ。

もちろん、権力の概念をより広く捉えることで、依然としてあらゆる政治的決定を権力政治の産物であると見なすことも可能である——例えば、メロス島に対する慈悲は、アテナイの対外的名声を高めるための戦略であり、結局は権力追求の副産物にすぎないといったような。しかしそれは、説明のための説明であって、事実をありのままに描写するものではない。少なくとも、私たちが政治の世界で事実道徳的議論をなすことについて、無道徳論者は (倫理学者 J・L・マッキーが言うところの) ある種の^{エラー・セオリー}錯誤理論を示す必要がある⁵⁾。

4) とはいえ、近年ではこうしたトゥキディデス理解は一面的であるとの研究もある (Lebow 2003 : chs. 3-4 ; 土山 2014 : 第1章)。

5) マッキーは道徳的懐疑主義を擁護するなかで、次のように主張した。「懐疑主義は、多くの人々が存在していると信じている、ある種の実在あるいは関係、客観的価値あるいは要件は存在しないと主張する。もちろん道徳上の懐疑論者は、それだけで終わりにしておくことはできない。彼の立場が少しでも説得力を持つものであるとするなら、彼が間違っている^{ウツ}とみなしているものに他の人々がどうして陥るのかについて、何らかの説明を加えなければならない」(Mackie 1977 : 17-8/12)。ちなみに、逆にリベラルな普遍主義の側から、政治的リアリズムに対するある種の錯誤理論が提示されているのは興味深い (Tsai 2013)。

政治の別道徳性

ゴイスに比べて、ウィリアムズの道徳に対する懐疑主義はより穏便である。ウィリアムズもまた、政治と道徳の二分法を一応の出発点とする。道徳的解決と政治的解決は自ずと異なるのであり、政治に学問的に携わる者はこの違いに敏感であるべきだというのだ。「政治哲学はただの応用道徳哲学……とは異なる。……とりわけ政治哲学は、権力やその規範的関連語である正統化といった政治的概念を使用せざるをえないという特徴をもつ」(Williams 2005: 77)。とはいえ、ウィリアムズの主張は道徳と政治を排他的対立項に置くものではない。むしろそれは、正統性の考察を中心とする政治の別道徳性を示唆するものである。

古典的には、ルネサンス期イタリアの思想家 N・マキアヴェリリアリズムが同様の立場を代表していると考えられる。彼が生きた時代のイタリアは、国際的には非常に脆弱な立場に置かれていた。そこでマキアヴェリは、『君主論』など一連の著作で、国際社会の厳しい現実を生き抜く強いイタリアを率いる君主の登場を待望し、またその処世術を詳しく説いたのだ。君主たる者は「必要とあれば、断固として悪のなかへも入っていくすべを知らねばならない」(マキアヴェリ 1998: 134) とさえ主張するマキアヴェリは、しばしば「悪の教師」とも評せられている (Strauss 1958)。

ただし、マキアヴェリの主張を先述した〈無道徳テーゼ〉と同一視するのも正確ではない。例えば彼は、同じ残酷な手段に訴えた施政者が、一方で政権を維持したり、他方で政権を追われたりした事例があるとし、そこでは「残酷が悪く用いられたか、あるいは良く用いられたか」の区別が重要であると言う (マキアヴェリ 1998: 71)。ここでは、(次章で見るとような) 種々の政治的目標に応じて、政治的手段のなかにも善い悪があったり悪い悪があったりするわけだ。この意味で、彼はやはり何らかの道徳的評価を下しているのである。

話を現代に戻すと、ウィリアムズの場合、権力はただ用いられるのではなく、正統に用いられるべきである。「正統な統治と直接的権力のあいだには本質的な違いがある。すなわち、政治的^{ライイト}正しさに関する数少ない必然的真理とは、そ

れがただの力^{マイト}ではないということだ」(Williams 2005: 135)。この主張——彼の用語では「基礎的正統性要求」(BLD)——は、倫理や道徳を過去の「政治の亡骸」と見なすゴイスの〈無道徳テーゼ〉とは明らかに似て非なるものである。それゆえ、ウィリアムズの立場をリベラルな主流派からどれほど根本的に異なったものと見なすかについては論争がある (Bavister-Gould 2013; Hall 2015; Sleat 2013: ch. 5)⁶⁾。

2. リアリズムの規範理論

以上見たように、政治的リアリストの一派は、道徳と政治を根本的に断絶するものと見なしているわけではなく、政治の世界には相応の政治道徳が必要であると指摘している。それは政治哲学を倫理学や道徳哲学の語彙に還元するものではないが、逆にそれを排除するものでもない。このように分析すること自体、政治的リアリズムの理論的含意を、その論敵である道徳主義や倫理第一主義の理論枠組みに回収し、切り詰めてしまうものに映るかもしれない。この点について、実はウィリアムズ自身の以下の言い方も若干曖昧である。

BLD がそれ自体道徳原理であるかどうかと問われるかもしれない。もしそうだととしても、それは政治に優先する道徳を意味するものではない。BLD とは、政治のようなものがあるならばそこに内在する主張である。とりわけ、第一の政治的問いがあるならばそこに内在するからである。(Williams 2005: 5)

筆者自身は、ここでのウィリアムズの〈別道徳テーゼ〉が、道徳一般ではなく道徳主義——すなわち、人生の選択において私たちが必要とするあらゆる考慮において、道徳的考慮を最優先する考え方——に向けられた批判であると捉えたい⁷⁾。これは、かつてウィリアムズがカント主義や功利主義に向けていた

6) 確かにゴイスも政治に特有の問題圏として正統性について論じているが (Geuss 2008: 34-6)、議論の参照先が M・ウェーバーであるように、その分析は概して正統性の起源と所在に関する経験的事実の次元に置かれている (Rossi 2010)。ゴイスとウィリアムズのさらなる比較については、Frazer 2010 を参照。

7) 道徳一般と道徳主義の区別については、Coady 2005: 2008: ch. 1 も参照。

道徳一元論批判とも通底する (Williams 1985)。そうだとすれば、政治的リアリストが奉じる別道徳ないし政治道徳とは何であり、それはリベラルな主流派と何がどう異なるのであろうか。本章では、政治的リアリズムを一種の規範理論であると位置づけ、その内実を概観したい。

正義と秩序

第一に、政治的リアリストは正義の探求と秩序の探求を区別し、後者を前者に優先する。これは、清教徒革命の内乱期にあって国内秩序の形成が至上課題であるとした T・ホップズの政治思想に明確に表れている。これを反映して、ウィリアムズは、「私はホップズの用語における『第一の』政治的問いを、秩序、保護、安全、信頼、協働の条件を保障するものとして特定する」と言う (Williams 2005 : 3)。分配的正義論を含む正義の探求はその後の政治課題であって、この点で従来のリベラルな主流派は物事の主従関係を転倒させてきたというのだ。

正義と秩序はともに政治的価値の一種である。それゆえ、内乱期に限らず、ときの状況によって後者のために前者が犠牲になることはありうる。とりわけ、正義に対する秩序の優先性は、国内社会よりも国際社会において生じやすい。なぜなら、そこでは正義内容の合意が一層得にくく、また正義の実現手段が一層おぼつかないからである (Bull 1995 : ch. 4 ; cf. Foot, Gaddis and Hurrell 2003)。同じ理由から、政治的リアリストは政治的決定一般に際して、伝統的に外交や和平の場面で用いられてきた「暫定協定」の構想を重視している (Gray 2000 : ch. 4 ; Horton 2010)⁸⁾。

帰結主義

リアリスト的規範理論の第二の特徴は帰結主義である。「帰結主義」とは、行為それ自体からその行為の善し悪しを評価する「義務論」とは異なり、行為によって生じる事態からその行為の善し悪しを評価する考え方である。政治的

8) 暫定協定について、より詳しくは木部 2010 を参照。

リアリストは、これをしばしば「^{ブルーデンス}慎慮」と呼ぶ。いわく、「慎重な心構え prudenzia とは、数々の不都合の特質をよく見分けて、最悪でないものを良策として選び取ることにある」(マキアヴェッリ 1998:168)。また「リアリズムは、慎慮、すなわち、あれこれの政治行動の結果を比較考量することを政治における至上の美德と考える」(Morgenthau 1978:11/58)。

実際、M・ウェーバーの責任倫理の事例を引くまでもなく、とりわけ政治の世界において、帰結の善し悪しこそが最重視されるべきだという意見は非常にありふれたものである。要するに、帰結主義は数ある規範理論のなかでも、政治の世界で別格の重要性を備えているのだ。帰結主義の政治的適合性がこれほど高いがゆえに、むしろリアリスト的規範理論として問われるべき問題は、なぜ帰結主義だけでは駄目なのかということである。事実、この問いこそ次章で検討する「汚れた手」の中心的テーマである。

反リベラリズム？

以上の政治的リアリストが掲げる政治道徳は、確かにその内容面で、リベラルな主流派が掲げるそれとは大きく異なっているように見える。第一に、秩序を重視し、正義を後回しにする主張は、その多くの議論を分配的正義論に費やしてきたロールズらリベラルな主流派との問題意識の違いを際立たせている。第二に、帰結主義を重視することは、伝統的にリベラルな主流派が批判の対象としてきた功利主義との連続性を強く想起させる。それゆえ、「政治的リアリズムの輪に加わる論者は、リベラルな政治哲学には何か間違っているところがあるという点で一致している」とさえ指摘されるのだ(North 2010:381)。

ただし私見では、この指摘には幾つかの誇張が混じっていると思われる。第一に、個々の政治的リアリストが、その主義主張において反リベラルだというのは事実と反する(Finlayson forthcoming)。第二に、その他の追従者はともかく、とりわけ政治的転回以降のロールズは、正統性の問題にも相応の配慮を見せている(松元 2005:第6章第3節)。第三に、ロールズが反功利主義者であるのは事実であるが、その批判の矛先はいわゆる総和主義に向けられたものであ

り、帰結主義に向けられたものではない (Rawls 1971 : 30/42-3)⁹⁾。以上の理由から、政治的リアリストを反リベラリズムと等置する必要はない¹⁰⁾。

ついでに言えば、政治的リアリストは、リベラルな主流派とは異なる系譜にある J・シュクラーの「恐怖のリベラリズム」論に対しては、むしろ肯定的に評価する向きがある (Williams 2005 : ch. 5 ; cf. Sagar forthcoming ; Sleat 2013 : ch. 4)。だからといって、シュクラーを政治的リアリストの一人に数えるのも時代錯誤であろう。シュクラーの政治思想には確かにリアリスト的——あるいは少なくとも反ユートピア主義的——要素があるが、もちろんその文脈は今日の理論動向と同一視できるものではない (Forrester 2012)。シュクラーに代表される、緩やかに反ユートピア主義を備えた所属大学の思想傾向は「ハーバード学派」とも呼ばれている¹¹⁾。

3. 「汚れた手」の倫理

ここで、本稿の主題である政治的悪の問題に立ち戻ろう。この問題について、帰結を重視する政治的リアリストが下す自然な推論は、「目的は手段を正当化する」型のマキャヴェリ主義である。実際、政治的リアリズムはしばしば、必要に応じて政治的悪に手を染める——「手を汚す」——ことを推奨する教義として描かれる (Bellamy 2010 ; Coady 2008 : chs. 4-5)。しかしながら、「汚れた手」の教義を規範理論の一種として描くと、ただちにひとつの逆説にぶつかる。というのも、「手を汚す」という言葉それ自体が、純粋な帰結主義に収まらない道徳の多様性・非画一性を示しているのである。

9) むしろ、リベラルの反帰結主義的側面は、功利主義の分配的正義とロールズの分配的正義とともに結果状態原理あるいはパターン付原理であるとして拒絶し、代わりに歴史的原理を掲げる R・ノージックら一部リバタリアンに帰せられるべきである (Nozick 1974 : ch. 7)。

10) ロールズと政治的リアリズムのさらなる比較については、Gledhill 2012 ; Thomas forthcoming も参照。

11) シュクラーのほか、C・フリードリッヒ、S・P・ハンチントン、M・ウォルツァー、H・マンスフィールド、L・ハーツ、S・ピア、K・ドイッチュなどが含まれる (Sabl 2011)。

「汚れた手」の教義

政治的悪としての「汚れた手」の問題をはじめて定式化したのは、先述したハーバード学派の一人 M・ウォルツァーである (Walzer 2007 : ch.17)¹²⁾。彼の問題提起は以下のようなものであった。都市のどこかに爆弾が仕掛けられた。万一爆弾が爆発すれば、数千もの無辜の命が失われることになる。一人のテロ容疑者を逮捕した。彼にその爆弾のありかを自白させるための唯一の手段は、容疑者を拷問にかけることである。はたして政治家は拷問に賛成すべきであろうか。その人は善い目的のためなら、どのような悪い手段にでも訴えることが許されるであろうか。

汚れた手は帰結主義者 (あるいは非義務論者) の教義である。それは、行為の善し悪しの評価が行為それ自体だけからは決まらないことを前提としている。純粹な義務論者によれば、行為それ自体の性質に照らして、拷問は決して許されない。しかし私たちにとって、数千の人命と引き換えにしてでも、一人の権利を尊重することは本当に正しいことであろうか。まったく逆に、純粹な帰結主義者からすれば、数千の人命を救うために一人を拷問することは、消極的に許容されるのみならず、積極的に推奨され、称賛されるのである。

しかし同時に、汚れた手は義務論者 (あるいは非帰結主義者) の教義でもあ

12) ウォルツァーは本稿が言うところの「政治的リアリスト」に当たるであろうか。彼がその名著『正しい戦争と不正な戦争』において、国際関係における (秩序のみならず) 正義の探求を主題としていること、また功利主義的帰結主義に対する異論を展開していること (Walzer 1977 : ch.14) に鑑みれば、その立場が基本的に反リアリスト的であると見られても不思議ではない。ただし、実態はより複雑であると思われる。第一に、ウォルツァーが同書で展開するリアリズム批判の対象は、トゥキディデスを念頭に置いた〈無道徳テーゼ〉である (Walzer 1977 : ch.1)。第二に、彼は同書では、「手を汚す」選択を「最高度緊急事態」と呼ばれるごく限られた状況でのみ許される選択だと断っているが (Walzer 1977 : 323-5/578-82)、別の論文では、「汚れた手のディレンマは政治的生活の中心的な特徴である」と言っている (Walzer 2007 : 280/489)。するとウォルツァーは、少なくとも政治的決定の一場面ではある種の〈別道徳テーゼ〉を受容しているようである。ちなみに彼は、「汚れた手」の教義をマキアヴェリ、ウェーバー、カミュの3つの系譜に分け、最後の系譜を「もっとも魅力的だと思いたくなる」と言っている (Walzer 2007 : ch.17 sec.5)。

る。手が「汚れる」という表現は、拷問それ自体が本来的に道徳的に望ましくない手段であることを議論の前提にしている。すなわち、行為の善し悪しの評価は、その行為によって生じる事態によって左右されるにもかかわらず、事態だけによっては決まらないということだ。実際ウォルツァーは、戦争の正義をめぐる R・B・プラントや R・M・ヘアの功利主義的道徳一元論に対する異論として、汚れた手の問題を提起したのである。

ウォルツァーいわく、「われわれは単純に、善を行うために悪を実行した人間を讃え、同時にわれわれは彼を罰することになろう。彼がなす善ゆえにわれわれは彼を讃えるが、彼がなす悪ゆえにわれわれは彼を罰するだろう」(Walzer 2007: 292/511)。これは多くの論者によって支離滅裂な主張だと批判されたようだが(Walzer 2007: 302/528)、筆者はむしろウォルツァーに共感的である。汚れた手の教義は、義務論／帰結主義という倫理学理論の垣根を飛び越える。それは、帰結主義とは根本的に相容れない複数の道徳の余地が存在するということだ。

義務論と帰結主義のあいだ

I・カントは「義務や拘束性の衝突はまったく考えられない」と断言し(Kant 1838: 24/40)、J・ベンサムは「功利性の原理が、あらゆる場合にそれによって支配されなければならない、正しい原理である」と断言する(Bentham 1823: 8/88)。これらの道徳一元論者たちには失礼ながら、私たちがここで見ているのは、複数の倫理や道徳的考慮が悲劇的に対立するジレンマ状況である。それでは、こうした状況に対して政治哲学者はどのように対処すればよいであろうか。ありうる方策は大別して3つある(松元 2015: 156-7)。

第一に、いずれかの理論的観点をより一層包括的に拡張することで、何らかの一般的な立脚点を見出すことである(統合論)。第二に、議論のレベルを質的に区分することで、複数の理論的観点を使い分けることである(混合論)。第三に、理論的一般化への希求を断念し、状況に応じてその都度異なった理論を用いることである(多元論)。筆者自身は暫定的に第三の方法を支持してい

るが(松元 2015:第9章)、いずれにしても、義務論的思考と帰結主義的思考の相克にいかに向き合うかという倫理学上の一大問題は、政治的文脈においても避けがたく生じるのである。

さらに言えば、秩序や帰結へのリアリスト的考慮が、必ずしも「汚い」手段と結びつくわけではない。それが事実問題として暴力手段と結びつきやすい傾向はあるかもしれないが、傾向性は必然性ではない。結局のところ、すべては状況と戦略次第である。例えば、従来理想主義的・ユートピア主義的思想の代表格と見られていた M・ガンジーの非暴力抵抗の思想については、それが強固なリアリスト的基盤に立っていることが近年指摘されている(Mantena 2012)。この意味で、政治的リアリズムは一種の平和主義思想と重なり合う可能性すらもっているわけだ。

4. 国際政治理論との関連

以上本稿では、これまで政治哲学における政治的リアリズム論争を分析と評価の俎上に載せてきた。その結果分かったことは、リアリズム思想の多くは、それ自体規範理論の一種として再構成できるということだ。「汚れた手」のような極限状況においてすら、私たちは何らかの道徳的判断を下しているのである。以上の要点を踏まえて、本章では最後に、以上の議論が国際政治学におけるリアリズムに対してもたらす含意について試論的に言及しよう。その理由は、今日の政治学分野においてリアリズムの思想的影響がもっとも強いと思われるのがこの分野であるからだ。

古典的リアリズムの場合

H・モーゲンソーは、戦後米国で国際政治学をひとつの学問分野として確立するために多大な寄与を行った。すなわち、政治の世界における固有の要素である「力^{パワー}によって定義される利益」に着目することにより、それまで法律や機構といった多様な観点が混在していた国際関係論において、政治学に由来する首尾一貫した分析枠組みを提示したのである。国際社会は他の何よりも権力

が織りなす独特な人間空間として描かれる。こうして「知的には、政治的リアリストは政治的領域の自律性を主張する。それは、経済学者、法律家および道学者がそれぞれの領域の自律性を主張するのと同じである」(Morgenthau 1978 : 12/60)。

これはともすれば、道徳と政治を根本的に断絶したものと見なす〈無道徳テーゼ〉の一種に映るかもしれない。しかし、ことはそう単純ではない。なぜなら、近年のモーゲンソー研究が詳らかにしているように¹³⁾、彼の国際政治観における道徳と政治の関係は、単なる対立項で結ばれるような排他的関係にあるわけではないからだ。冷戦期におけるモーゲンソーの主要な批判対象は、保守勢力であれ革新勢力であれ、理想的情熱に動かされ、現実から乖離した国際政治であって、道徳そのものではない。例えば以下の一節には、モーゲンソーの〈別道徳テーゼ〉が明白に示されている。

がんらい道徳性によって政治を道徳化するということと、不道徳性を伴った政治的現実主義とを、方程式でつなぐこと自体がそもそも無理なのである。われわれのとらなければならない選択は、道徳的原則と、道徳的尊厳性を欠如した国家的利益とのうちのどちらを選ぶかということではなくて、政治的現実から遊離した一組の道徳的原則を選ぶか、それとも、政治的現実の上に立った一組の道徳的原則を選ぶかということなのである。(Morgenthau 1951 : 33/34)

構造的リアリズムの場合

K・ウォルツは、^ア無政府状態^キという国際関係の構造的条件に着目する。国内社会とは異なり、国際社会では道徳を実効的に保証する政府機関のような権威が存在しない以上、生き残り＝安全保障を至上命題とする各ユニット＝国家にとっては、言葉ではなく実力が必要なのである。「注目すべきは、協力を阻んでいるのが当事者どちらかの性格や短期的意図ではない、という点である。安全が保障されない状況……が協力を阻むのである」(Waltz 1979 : 105/139)。そ

13) Scheuerman 2013 : 812 n.2 の文献リストが有益である。また、邦語研究では宮下 2012 : 第 5 章がこの点を扱っている。

れゆえ、こうした国際社会の構造的條件は、必然的に道徳ではなく権力に訴えかけるよう各国家の行動を縛ることになる。

こうした主張は、政治の世界において道徳の所在や機能を認めない〈無道徳テーゼ〉の一例である。ウォルツにとって最大の戦争原因は、人間ではなくシステムであり、ある時ある場所で戦争を生じさせるものは、ユニットの数およびその能力の分布が織り成すシステムの状況である。それゆえ、国際平和の條件は一国の高尚や善意などではなく、諸国間の^{バランス・オブ・パワー}勢力均衡いかんにかかっている。しかしながら、醒めたリアリスト的観点からは、こうして「^{マイト}力が物事を決定する場合、^{ライト}正義をめぐる血みどろの闘争は、かえって容易に回避できるのである」(Waltz 1979: 112/148)。

ただし、構造的リアリストがこうした〈無道徳テーゼ〉を徹底しているかどうかは別問題である。例えば J・ミアシャイマーらは、イラク戦争(2003年)当時、開戦は賢明な政治的判断ではないとして米国政権を批判していた(松元 2013: 149-52)¹⁴⁾。無論、一方でその理論体系が示すように、国際政治のダイナミズムが「力が物事を決定する」傾向をもっていることと、他方でその政策批判が示すように、国内政治のダイナミズムが自由選択の余地を残していることは、位相を異にしており、必ずしも矛盾するわけではない。ともあれ、カント風に言えば、こうして(部分的にであれ)必然性の王国から自由の王国に飛躍することが、人間が道徳的存在であるための必要条件なのである。

戦略と道徳

まとめると、古典的・構造的リアリズムにおいて程度の差はあれ、何らかの規範的次元が含まれていることが分かる(Bell 2010; Coady 2005; 2008: ch.1; Donnelly 1992; 2008)。ただし、その規範的次元が自国にとっての最善の結果に留まるかぎり、政治的リアリズムの教えは依然として道徳的判断ではなく戦略

14) 構造的リアリズムにおける規範的・政策的次元(と古典的リアリズムにおけるそれとの比較)については、篠原 2009; 末内 1992も参照。ちなみに、ミアシャイマーには政治的嘘に関する興味深い著作がある(Mearsheimer 2011)。

的・判断にすぎないとも考えられる。ここで戦略的判断とは、道徳的判断とは異なり、自己利益を配慮し、そのための目的合理的な手段を追求することである¹⁵⁾。確かに、国際社会の規範は国内社会の規範に比べて、利己主義の影響を受けやすい。それは、国際正義論において、援助や介入の是非をめぐり、しばしば国益の有無が争点になることにも示されている。

しかしながら、外交・安全保障をめぐる政治的判断が道徳的考慮によるものか戦略的考慮によるものかは、必ずしも明確に切り分けられるわけではない。第一に、国際政治における国益の追求は、国内政治における公益の追求としばしば表裏一体である。例えば人道的介入の是非をめぐっては、介入の決定あるいは介入の方法に関して、自国の利益と人道的義務のあいだの優先順位が問題となる。筆者はここで、前者を後者よりも優先する政治的判断を軽々しく非難するつもりはない。各国の政治家の存在理由は他国民ではなく自国民の利益を確保することであり、民主国家の場合、政治家はその約束のもとに自らの地位を獲得しているからだ。道徳的に善い政治家が必ずしも政治的に善い政治家とは限らないという政治道徳の二面性は、こうして国際政治の場面では一層顕著に生じるのである。

第二に、国際政治における国家行動の指導原理が国益の追求であることが事実であるとしても、その国家行動がもたらす帰結の範囲を厳密に自国に限定することは、リアリストにとってもありそうにない。例えば、一方で自国（民）の経済や福祉を他国（民）のそれに先んじて確保することは、貿易交渉や条約交渉における外交的手腕として肯定的に評価されるかもしれないが、他方で自国（民）の経済や福祉のような副次的利益を確保するためだけに、他国（民）の安全保障のような死活的利益を武力で侵害しても構わないという主張が同じ評価に値するであろうか。「政治行動の結果を比較考量せよ」という政治的リアリズムの教えは、利己主義の程度がもっとも強いと考えられる国際社会においてすら、自国を有利にする戦略的判断に[・]尽[・]きるものではない（Coady 2008 :

15) 戦略的判断と道徳的判断の区別については、Nye 1986 : 10-3/16-21 ; Walzer 1977 : 13-6/64-8 も参照。

21-8)。

お わ り に

以上本稿では、政治的リアリズム論争を素材としながら、政治的悪の問題を規範的に分析するための枠組みを提示してきた。最後に、政治的リアリズムに関する私見を簡単に提示しておこう。秩序や帰結を重視する政治倫理の一側面を強調している点で、政治的リアリズムには一定の規範理論的意義がある。ただし同時に重要なことは、「汚れた手」の問題が部分的に示していたように）正義や行為それ自体の評価もまた、政治倫理の一側面を確かに担っているということである。後者に特化するだけの理想主義が一面的であるとすれば、前者に特化するだけの政治的リアリズムも一面的である。その意味で、「リアリストであれ」という道徳一元論の誘惑にも視野狭窄の危険が伴う。

本稿の結論を敷衍すると、私たちは政治的リアリズムを、規範理論の正当な一派として認める必要がありそうだ。これは、政治的悪の分析を等閑視してきた従来の規範研究の偏向をただす効果をもたらすであろう。今後は、正義の分析と悪の分析を織り込んだ、政治的リアリズムを含む政治倫理の体系的検討が必要になる。すなわち、正義の追求が同時に悪となり、あるいは悪の追求が同時に正義となるような、法律、経済、道徳その他の領域とは異なる政治の世界の独自性を再構成することが、その重要課題になると思われる。

引用・参考文献

- Baderin, Alice (2014). "Two Forms of Realism in Political Theory." *European Journal of Political Theory* 13/2: 132-53.
- Bavister-Gould, Alex (2013). "Bernard Williams: Political Realism and the Limits of Legitimacy." *European Journal of Philosophy* 21/4: 593-610.
- Bell, Duncan (2010). "Political Realism and the Limits of Ethics." In *Ethics and World Politics*, ed. Duncan Bell. Oxford: Oxford University Press: 93-110.
- Bellamy, Richard (2010). "Dirty Hands and Clean Gloves: Liberal Ideals and Real Politics." *European Journal of Political Theory* 9/4: 412-30.
- Bentham, Jeremy (1823). *An Introduction to the Principles of Morals and*

- Legislation*. Oxford: Clarendon Press. (山下重一訳「道徳および立法の諸原理序説」『世界の名著 49』中央公論新社, 1979年, 69-210頁)
- Bufacchi, Vittorio (ed.) (2009). *Violence: A Philosophical Anthology*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Bufacchi, Vittorio (ed.) (2011). *Rethinking Violence*. London: Routledge.
- Bull, Hedley (1995). *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, 2nd ed. Basingstoke: Macmillan. (白杵英一訳『国際社会論——アナーキカル・ソサイエティ』岩波書店, 2000年)
- Carson, Thomas L. (2010). *Lying and Deception: Theory and Practice*. Oxford: Oxford University Press.
- Ceva, Emanuela and Enzo Rossi (eds.) (2012). *Justice, Legitimacy, and Diversity: Political Authority between Realism and Moralism*. Abingdon: Routledge.
- Chin, Clayton (forthcoming). “Beyond Analytic and Continental in Contemporary Political Thought: Pragmatic Methodological Pluralism and the Situated Turn.” *European Journal of Political Theory*.
- Coady, C. A. J. (2005). “The Moral Reality in Realism.” *Journal of Applied Philosophy* 22/2: 121-36.
- Coady, C. A. J. (2008). *Messy Morality: The Challenge of Politics*. Oxford: Clarendon Press.
- Donnelly, Jack (1992). “Twentieth-Century Realism.” In *Traditions of International Ethics*, eds. Terry Nardin and David R. Mapel. Cambridge: Cambridge University Press: 85-111.
- Donnelly, Jack (2008). “The Ethics of Realism.” In *The Oxford Handbook of International Relations*, eds. Christian Reus-Smit and Duncan Snidal. Oxford: Oxford University Press: 150-62.
- Finlayson, Lorna (forthcoming). “With Radicals like These, Who Needs Conservatives? Doom, Gloom, and Realism in Political Theory.” *European Journal of Political Theory*.
- Floyd, Jonathan and Marc Stears (2011). *Political Philosophy versus History? Contextualism and Real Politics in Contemporary Political Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Foot, Rosemary, John Gaddis and Andrew Hurrell (eds.) (2003). *Order and Justice in International Relations*. Oxford: Oxford University Press.
- Forrester, Katrina (2012). “Judith Shklar, Bernard Williams and Political Realism.” *European Journal of Political Theory* 11/3: 247-72.
- Frazer, Elizabeth (2010). “What’s Real in Political Philosophy?” *Contemporary*

Political Theory 9/4: 490-507.

- Friedrich, Carl J. (1972). *The Pathology of Politics: Violence, Betrayal, Corruption, Secrecy, and Propaganda*. New York: Harper and Row. (宇治琢美訳『政治の病理学——暴力、裏切り、汚職、秘密主義、宣伝活動』法政大学出版局, 1997年)
- Galston, William A. (2010). "Realism in Political Theory." *European Journal of Political Theory* 9/4: 385-411.
- Geuss, Raymond (2008). *Philosophy and Real Politics*. Princeton: Princeton University Press.
- Geuss, Raymond (2010). *Politics and the Imagination*. Princeton: Princeton University Press.
- Gledhill, James (2012). "Rawls and Realism." *Social Theory and Practice* 38/1: 55-82.
- Gray, John (2000). *Two Faces of Liberalism*. Cambridge: Polity Press. (松野弘監訳『自由主義の二つの顔——価値多元主義と共生の政治哲学』ミネルヴァ書房, 2006年)
- Hall, Edward (2015). "Bernard Williams and the Basic Legitimation Demand: A Defence." *Political Studies* 63/2: 466-80.
- Heywood, Paul M. (ed.) (2015). *Routledge Handbook of Political Corruption*. Abingdon: Routledge.
- Honig, Bonnie and Marc Stears (2011). "The New Realism: From Modus Vivendi to Justice." In Floyd and Stears 2011: 177-205.
- Horton, John (2010). "Realism, Liberal Moralism and a Political Theory of Modus Vivendi." *European Journal of Political Theory* 9/4: 431-48.
- Kant, Immanuel [1797] (1838). *Metaphysik der Sitten in zwei Theilen: Rechtslehre, Tugendlehre*. Leipzig: Modes und Baumann. (樽井正義・池尾恭一訳『カント全集 11 人倫の形而上学』岩波書店, 2002年)
- Lebow, Richard N. (2003). *The Tragic Vision of Politics: Ethics, Interests and Orders*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mackie, J. L. (1977). *Ethics: Inventing Right and Wrong*. London: Penguin Books. (加藤尚武監訳『倫理学——道徳を創造する』哲書房, 1990年)
- Mantena, Karuna (2012). "Another Realism: The Politics of Gandhian Nonviolence." *American Political Science Review* 106/2: 455-70.
- Mason, Andrew (2010). "Rawlsian Theory and the Circumstances of Politics." *Political Theory* 38/5: 658-83.
- Mearsheimer, John J. (2011). *Why Leaders Lie: The Truth about Lying in*

- International Politics*. New York: Oxford University Press. (奥山真司訳『なぜリーダーはウソをつくのか——国際政治で使われる5つの「戦略的なウソ」』五月書房, 2012年)
- Morgenthau, Hans J. (1951). *In Defense of the National Interest: A Critical Examination of American Foreign Policy*. New York: Knopf. (鈴木成高・湯川宏訳『世界政治と国家理性』創文社, 1954年)
- Morgenthau, Hans J. (1978). *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*. 5th ed., rev. New York: Knopf. (原彬久監訳『国際政治——権力と平和上』岩波文庫, 2013年)
- North, Richard (2010). “Political Realism: Introduction.” *European Journal of Political Theory* 9/4: 381-4.
- Nozick, Robert (1974). *Anarchy, State, and Utopia*. New York: Basic Books. (嶋津格訳『アナキー・国家・ユートピア——国家の正当性とその限界』木鐸社, 2002年)
- Nye Jr., Joseph S. (1986). *Nuclear Ethics*. New York: Free Press. (土山實男訳『核戦略と倫理』同文館出版, 1988年)
- Philp, Mark (2012). “Realism without Illusions.” *Political Theory* 40/5: 629-49.
- Rawls, John (1971). *A Theory of Justice*. Cambridge, M. A.: Belknap Press of Harvard University Press. (川本隆史・福間聡・神島裕子訳『正義論 改訂版』紀伊國屋書店, 2010年)
- Rossi, Enzo (2010). “Reality and Imagination in Political Theory and Practice: On Raymond Geuss’s Realism.” *European Journal of Political Theory* 9/4: 504-12.
- Rossi, Enzo and Matt Sleat (2014). “Realism in Normative Political Theory.” *Philosophy Compass* 9/10: 689-701.
- Runciman, David (2008). *Political Hypocrisy: The Mask of Power, from Hobbes to Orwell and Beyond*. Princeton: Princeton University Press.
- Runciman, David (2012). “What Is Realistic Political Philosophy?” *Metaphilosophy* 43/1-2: 58-70.
- Sabl, Andrew (2011). “History and Reality: Idealist Pathologies and ‘Harvard School’ Remedies.” In Floyd and Stears 2011: 151-76.
- Sagar, Paul (forthcoming). “From Scepticism to Liberalism? Bernard Williams, the Foundations of Liberalism and Political Realism.” *Political Studies*.
- Sangiovanni, Andrea (2008). “Justice and the Priority of Politics to Morality.” *Journal of Political Philosophy* 16/2: 137-64.
- Scheurman, William E. (2013). “The Realist Revival in Political Philosophy, or: Why New Is Not Always Improved.” *International Politics* 50/6: 798-814.

- Sigwart, Hans-Jörg (2013). "The Logic of Legitimacy: Ethics in Political Realism." *Review of Politics* 75/3: 407-32.
- Sleat, Matt (2013). *Liberal Realism: A Realist Theory of Liberal Politics*. Manchester: Manchester University Press.
- Sleat, Matt (2014). "Legitimacy in Realist Thought: Between Moralism and *Realpolitik*." *Political Theory* 42/3: 314-37.
- Sleat, Matt (forthcoming). "Realism, Liberalism and Non-ideal Theory: Or, Are There Two Ways to Do Realistic Political Theory?" *Political Studies*.
- Stears, Marc (2007). "Liberalism and the Politics of Compulsion." *British Journal of Political Science* 37/3: 533-53.
- Strauss, Leo (1958). *Thoughts on Machiavelli*. Glencoe: Free Press. (飯島昇藏・厚見恵一郎・村田 玲訳『哲学者マキアヴェッリについて』勁草書房, 2011年)
- Thomas, Alan (forthcoming). "Rawls and Political Realism: Realistic Utopianism or Judgement in Bad Faith?" *European Journal of Political Theory*.
- Tsai, George (2013). "An Error Theory for Liberal Universalism." *Journal of Political Philosophy* 21/3: 305-25.
- Waldron, Jeremy (1999). *Law and Disagreement*. Oxford: Clarendon Press.
- Waldron, Jeremy (2013). "Political Political Theory: An Inaugural Lecture." *Journal of Political Philosophy* 21/1: 1-23.
- Waltz, Kenneth (1979). *Theory of International Politics*. Reading: Addison-Wesley. (河野 勝・岡垣知子訳『国際政治の理論』勁草書房, 2010年)
- Walzer, Michael (1977). *Just and Unjust Wars: A Moral Argument with Historical Illustrations*. New York: Basic Books. (萩原能久監訳『正しい戦争と不正な戦争』風行社, 2008年)
- Walzer, Michael (2007). *Thinking Politically: Essays in Political Theory*, ed. David Miller. New Haven: Yale University Press. (萩原能久・齋藤純一監訳『政治的に考える——マイケル・ウォルツァー論集』風行社, 2012年)
- Williams, Bernard (1985). *Ethics and the Limits of Philosophy*. Cambridge, M. A.: Harvard University Press. (森際康友・下川 潔訳『生き方について哲学は何が言えるか』産業図書, 1993年)
- Williams, Bernard (2005). *In the Beginning Was the Deed: Realism and Moralism in Political Argument*. Princeton: Princeton University Press.
- 木部尚志 (2010) 「政治思想としての Modus Vivendi」『政治思想学会会報』第31号, 1-5頁。
- 篠原初枝 (2009) 「アメリカ国際政治学者の戦争批判——古典的リアリズムと構造的リアリズム」『思想』第1020号, 235-49頁。

政治的悪の規範理論的分析

- 末内啓子（1992）「リアリズムとネオリイズムの国家中心モデル——理論と規範の関係の一考察」『国際政治』第101号，90-105頁。
- 土山實男（2014）『安全保障の国際政治学——焦りと傲り 第2版』有斐閣。
- 中金 聡（2000）『政治の生理学——必要悪のアートと論理』勁草書房。
- マキアヴェッリ（1998）『君主論』河島英昭訳，岩波文庫。
- 松元雅和（2013）『平和主義とは何か——政治哲学で考える戦争と平和』中公新書。
- （2015）『応用政治哲学——方法論の探究』風行社。
- 丸山眞男 [1958]（2014）「政治的判断」松本礼二編注『政治の世界——他十篇』岩波文庫，339-93頁。
- 宮下 豊（2012）『ハンス・J・モーゲンソ어의国際政治思想』大学教育出版。

謝辞 本稿は、日本政治学会2015年度研究大会（2015年10月11日，千葉大学）ならびに駒場国際政治ワークショップ（2015年12月10日，東京大学）の機会に報告した原稿をもとにしている。報告時の質疑応答において参加者の方々，とりわけ添谷育志先生，中金 聡先生，中村長史氏，若狭彰室氏より有益なご批判・コメントを頂いたことに深く御礼と感謝の念を表したい。なお本稿は，科学研究費若手研究B（課題番号：26770017）による研究成果の一部である。